「親分、変なことがありますよ」

赤蜻蛉の気 のある 八五郎 日 の行方を眺 のガラ 0 の平次は縁側の柱にもたれて、 夕刻です。 ッ八が、長んがい顔を糸瓜棚へちまだな め ておりました。 この上もなくのんびりした秋 粉煙草をせせりながら、 の下から覗かせたと

びっ く りさせるじゃな いか、 俺は糸瓜が物を言っ た 0 か 思 つ

たよ」

「冗談でしょう。 糸瓜が髷を結って、意気な袷を着るも の ですか」

ガラッ八はその所謂意気な袷の衣紋を直して、 ちょ いと結 い立

ての髷節に触って見るのでした。

「だから、 変なんだよ。 糸瓜が髷を結ったり、 意気な袷を着た ŋ

「まぜっ返しちゃいけません」

平次とガラ ッ 八は、 相変らずこんな調子 で話を運ぶのでした。

じゃ、 何が変なんだ、 そこで申上げな」

「その前に煙草を一服」

「世話の焼ける野郎だ」

平次は煙草盆を押しやります。

恐ろ 粉 だ。 埃だか煙草だか、 嗅ゕ e s で 見なきゃ 解らな *(* \

「贅沢を言うな」

「相変らずですね、親分」

貧乏 ラ 御 用 ッ ガ ラ か 聞 に ッ 八 5 0 は 銭 抜 は 形 け 平 妙にしん 不 切 ·思議 次が、 れ ない で み そ 腹立たしくてたまらな の りしま の が、 清は 廉さの故に、 平次信仰で一パイ した。 江戸 開府以来と言 11 か つ まで経 つ に た な の つ で つ て わ す て b れ 11 る た名 ガ

きな お 世話 だ。 粉 煙草は 俺 が物好きで呑むん だよ。 そ れ

より ŕ そ 変な 話 とい う 0 は 何な ん だ

根 岸 0 御にいんに 殿裏 0 市 太郎 殺 0 後 日物語 が あ るん で

「下手人でも判ったのか」

あ れ ば か ŋ は 三輪 0 親 分 が と月越 血 眼 で 捜 て () る が 判

りませんよ」

「じゃ、何が変なんだ」

親分に言わ れ て この 間 か 5 気をつ け 7 4 ると あ 0 女

お菊という十八九の 可愛ら 11 娘 が 毎 日 浅草 観音様 な

2

詣りをするじゃありませんか」

信心に不思議 はあ るま 4 日参をし 7 岡 つ 引 に 睨 ま れ た 日

江 戸 に 怪 な (J 人 間 は 幾 b 11 な 11 ح ح に な るぜ」

「それが変なんで」

「娘が綺麗過ぎるんだろう」

そ 0 綺 麗 過ぎる娘 が 観音様 に お 詣 りをする だ け な 5 わ な 11

ず 御ぉ 神。 籤^じを 引 く 0 はどう し た わ け で しょう

「毎日か」

日 欠^か ま せ 6 そ の 片 引 11 た 御 神 籖 を 八 つ K 畳 W で、

外 粂ゟ 0 平心 内ない 様 0) 格 子 に 結 わ Ž

「毎日同じことをやるのか」

あ つ が つ け て か 5 $\dot{+}$ H 0 間 H b 欠 か ませ ん よ。 降 つ て

P 照 っても」

刻は?」

巳刻(十時)から午刻 (十二時)

待ちな、 元三大師 の御神籤には忌日があるものだ。 の間 で 日 も時

も構

わず、毎日御神籤を引くのは、 「だからあ っしが変だと言ったじゃありませんか いくら小娘でも変じゃない か、 を

結わ せたり、 意気な袷を着せたのは親分の方で

「そん なことはどうでも宜 *i* 1 その娘は誰 かと逢引をす る 様

子はな e s のかし

「根岸 から真っ すぐ に来て、 真 つ すぐ に 帰 りますよ。 尤も、 とき

どき変 な 野郎 が 娘 0 後を つけて (J 、る様子 です が ね、 振 り向 11

見ませんよ」

変な野郎?」

若くてちょ つ と渋があ 0) む けた 娘 の 後を つ け る ん だ か ら、 世

まともな 人間じ やあ りません

お前もそ のまともでな 11 人間 0 人だろう」

ッ

「ところでその 娘 は、 引 4 たお 神籤を て (J ね 11 K 読 む 0

平次の問 () は 妙なところへ立ち入ります。

寧 にも ぞんざ (1) にも、 見ようともしませ 6

フー

「そのまま八つに畳 元んで帯 のあ () だ ^ 挾 ん で、 御 神 籖 所 か らだん

だん 前 へ 立っ を降 て り て 石畳を 帯 のあ 踏ぶ 11 だか ん で 5 • 先 刻 門もん 0 御 を 神籤を出し 出 て 粂 0 て格 平 内 子 様 に 0 結 お わえ 堂

る んで

そ の 手順に間違 e st は な e st だろうな

 \mathbf{H} 同 じ ے とをや る W だ か 5 間 違 *(y* つこ は あ ŋ ま せ ん ょ ほ ど

念入 ŋ な 願 を ゕ ける ん でし ょ う ね

面 白 11 な 八、 明日 は 俺が 行 つ て、 娘 の所作 :を見極 め よう そ 11

は 何 か 理由 が あ りそうだ」

エ ー、親分が乗出すんですか 三 輪^ゎ 0 親 分 が 気を揉む

見境もなく 人を縛りますぜ」

な

よう 平 次は 粉 食 は相変らず赤蜻蛉のなこともあるまい」 煙 0 草 仕 度 0 に 煙を不精ら 0 乱 乾ぃ 物ぃ れ飛ぶ 燻がす を焼 0 0 を 臭 で 眺 11 た。 が め 軒 な 女房 がら、 籠 0 ŋ 鉄で ま お 拐が す。 静 仙ん は 貧

う 人 あ 根 力 が 岸 月 は り 隠 b 殿裏 前 中老人、 0 ことで の武家出らし 市太郎 した。 ح 41 11 母 う 娘 0 を 0 家 斬 ^ つ 曲 せ 者。 て 逃げ が うせ 忍 び 込 た ん 0 は P 用

美 ح ば 立 派 か 母 う な 親 e s ŋ のは 婦 娘 0) 人。 女主 で そ た 人は浪乃と言って、 + 娘 て美 八か は十二三で、 九で、 4 下 ح 殺され れば غ 三十 か 11 う た り ょ 市 五 は 六 \mathcal{H} ŋ 太 郎老人 月 は 0 少し陰気 0 陽 お 腰元 は 0 ょ Ŧī. う + 5 で を は な 越 ある 明 11 た が

武家出とば 引 店舗も確かで、 て 来 かり、 た 0 は 何ん 去年 氏も素姓も の 0 仔細もなく過して 暮 わ ひ か つ そ りませ り ん いるうち、 が、 た暮 近所 ょ 0 今 う 評 か で 5 判 西 玉

す

まま逃 帰 る う کخ — 市 つ て 太 げ 来 カ月前 郎 た て 老人を お菊 しま つ の声 ある夜曲者が忍 斬 た ŋ ع に 殺 お ć ý どろ う 0 奥 で i s て、 す び込んで、 踏 込むところを、 何 んに 入 口 も盗む隙も の六 折よ 畳 なく に 休 か そ で 5 11

せん あ 寝 主 ح 5 る 11 ٤ り、 頚 を ع て 検屍 だ 取 0 断んだん 市太 も滞 け を 浪 そ る て 末。 穾 b 何 乃 は 0 魔作 کر 郎 解 か とき家 りな 0 ん に を れ P つ 5 た 殺 取 \boldsymbol{b} < 小 て らず お した さ す 知 0 主 ع 中 5 み ŋ 11 人 曲者 ず、 太刀 ま ます 娘 に逃げう に 居 0 0 早^さな 苗ぇ 浪 で、 は、 たの 奥に たが 乃を伏 は、 と二人 せ 裏 お 11 菊 た た 下げ ・手人 か 浪 殺さ し が 0 ら入 ŧ 拝むように 帰 乃 で した。 \mathfrak{h}_{\circ} れ は は つ たと 怪 た 何 って来た 娘 市 ん き 市 は 太 ع 11 して は 物 郎 太 風か ま 郎 お 音 邪ぜ 0 て だ 菊 e s 0 に 外 b傷 気 挙 た 虫 に 飛 0 声 は 味 は が ん 0 前 に 息 で で 驚 出 早 女 ま が か

た 出 め P が 切 土 か さ 地 経 ŋ 7 表 れ ち 0 0 あま た ま ま 手 御 で、 格 した 0) 人 用 子 た。 でし 聞 子 り 0 戸 三輪 が、 見 П 分 は を 当も た そ 0 内 八 出さず 一応 0 0 か 万七は、 Ŧī. あ つ 5 現 か 郎 乱んぼう 11 場を見 ず、 だ係 に 帰 に そ そ 時を ŋ つ 外さ た て の つ 0 だ と見張ら し まま愚図 移さず乗込 同 れ まい け 心 ` ` 0 六 三輪 勧 畳 愚 せ そ め で、 て、 図と 0 みました 0 パ 後 方 1 七に 情 は 銭 一力 0 \equiv 勢 形 血 月と 輪 義 が 0 0 0 `` 理 平 0 海 まる 万 を 次 う日 七 立 は 7 9 0

浅 草 そ 0 H 五 ٤ 郎 が 御ぉ 神 美 籤じ ٤ 11 下 女 の平内様 の お菊 0 の格 動 静を見張 子 の謎を見付け つ て 11 るうち、 ので

「親分、出かけましょうか」

翌る日 の朝、 まだ飯も済まぬうちに飛んで来たのは、 勢 い込ん

だ八五郎でした。

「たいそう早いじゃないか」

でも根岸から観音様に廻ると、 昼近くな りますよ」

そ いつは正直過ぎるだろう、 御神籤所を見張っただけでたくさ

んだよ」

だが、 このガラ ッ 八 0 馬鹿 正直さが、 平次のた め 11 ろ いろ

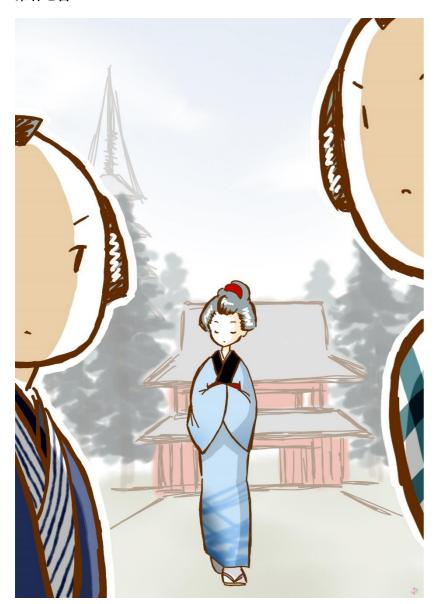
のことを発見してくれるのでした。

馬を眺めた 観音様にたどり着 り、 鳩と に 二餌をや () た 0 はちょうどヒ つ たり、 ざっと半刻ばかり待) 刻っ (十時 頃、 つ て は絵え

ع |

「親分、来ましたよ」

ガラッ 八はそっと平次の 袖を引きました。



©2017 萩 柚月

真っ て、 たまま、 る お菊 見るとちょうど仁王門を入って来るのは、平次にも見覚えのあ すぐ 小銭を に段を登って、 ひ 摘ま た う可愛ら 拝 ん でポ みに 拝み入 イと投 大賽銭箱 い下女。 る げ、 0 鈴 でし 鳩にも五 の緒に心持触れて、 の前に立つと、 た 重の塔にも眼をくれず、 赤 い紙入を出し 双掌を合せ

「ちょいと、可愛らしいでしょう」

「黙っていろ」

鼻 筋 0 通 つ た、 ふ く ょ か な 横 顔 を ガ ラ ッ 八 は 指

親分」

「何んだ、うるさいな」

あれがまともでない人間で――

まま、 振 ŋ 凝じ 返ると段 っと 娘 0 0 中 様 程 子 を見て 0 ところ () に立 る 0 って、 は 渡 り中間に 不精らし ら く 懐 様子 手をした を

た中年男です。

「なるほど」

「あ、娘は御神籤を引いていますよ」

しッ

に畳ん 下 女のお で、 菊は \boldsymbol{b} う 御 神籤を引くと、 つ 中 程 か ら折 つ て 別段それ 帯 0 あ を見るでもなく、 11 だ ^ す べ り込ませま 八 つ

さで、 ら、 め 済まし て そこか 物蔭 た どことも た 顔 か 5 らそ は、 相 御堂を出 0 な ょ つ 一度 ع く か 姿を消 て、 眼を光ら 5 も四方を見ません。 ぬ 男 石畳を渡 してしま 平心 て居るか 凡に って仁王 な () まし 日 P 程 段 一門を出 た。 わ を 0 か < 中途からそれ りませ り 11 や、 返す るま どう よう で、 ん が を見 か な 娘 した 境 0 詰 内 取

に は ざ つ ع 見渡 したところ、 怪 し e st 人影 b な か つ た 0 で す

帯 0 お 菊 あ (J は だ 粂 か 0 5 平 先 内 刻 様 0 0 堂 御 神 0 籖 前 を に 取 立 出 つ ٤, Ļ 堂 こ れ 0 格子 b 事 務 ^ 器 的 用 な な 冷 手付 さで で

ざ つ ع 結 び まし た。

四あた 方り を 見ようと b な 11 お そろ 11 胆も 0 据か つ た 娘 な

いかし

法。 院が 銭 形 0 平 横 次 0 が 方 そう ^ 言 美 し つ た 11 鳥 時 0 ょ お 菊 う に は 姿を隠 もう平 す 内 様 0 で 0 堂 た を 離 れ 伝ん

沸ぎ さ 0 を さ 見え 賑 知 Þ を 5 0 11 とき を 隠 巻き返す か な 集 な れ 11 事 め に 何 0 尽 件 処 か つ を か け し 0 押 て行く ら た で 相 す。 変ら とも ような 包ん 様子 ず な 浅草 で、 振 現 ŋ で 活きた す の 向 わ 雑沓は、 が れ 11 た た 変 変 て 見よ 坩る お菊 堝ぼ は うとも 0 よう そ 怪 0 意 れ し に、 味 を し 11 \$ 男、 ま 知 せ な 刻 つ ん。 々 く て お 見え 菊 新 11 江 る 0 る 戸 跡

=

ここま で 見 て、 お前 は 引揚げ たんだろう」

平 次 は ガ ラ ッ 八 0 港ぼ つ ع た 顔 を顧い みまし た。

照 何 ん ら あ さ 0 変んなでっ 娘 れ を て b つ あ け ど ん り 7 な送 ませ 見 ま り狼だ λ よ。 た が って 江 戸 御 隠 0) 真 業さ 殿 ん 裏 は 中 で ^ きませ じ 真 Þ つ • す 真昼 に 帰 0 天道様 る け

ガラッ八は長いあごを撫でるのです。

何を言うん だ 娘 0 ことじ Þ な *i y* あ れ だ

ーヘエー

平 次 は 粂 の 平 内 様 0 お堂を指 な がら 続 け ま た

じ あ る な あ が 11 0 に 格 さ 子 た れ に 9 た て た 11 る < つ 変 さ ん だ。 つ ん 御ぉ た 神々 古 0 籤じ が 11 あ 0 が 新 結 る筈だ」 ん し 11 で あ 0 る だろ 勘定 **ب** 切 れ 縁ん 結す な び 61 ほ 0 ど ま

端 つ こを ち ょ 11 ع 紅に で 染 め た 御 神 籖 だ ょ 天 地 紅 0 御

ん か 何 処 0 お 寺 ^ 行 つ た つ 7 出 る b 0 Þ な 11

エ

あ 0 娘 は 観音 様 0 本 堂 か 5 此 処ま で 来 る あ 11 だ に 御 神 籖 0 端に

を染め る 暇 が な か つ た筈だ

娘が結 だが わ あ 0 御 ん 神籤 だ は前 間違 に は 11 無 は か つ たこ 11 ع 61 は 確した か 11 だ 御 神 Þ 籖 は り あ 読 0

な

ま

引

た

を

え

た

みも が あ せ ず つ た に 平 に 違 内 様 11 あ 0 る 格 ま 子 11 に 結 0 ぶ あ 筈 0 赤 は な 13 御 11 神 か ら、 籖 は、 Þ 家 は か ŋ 帯 ら 用 0 意 間 に

来た ん だろう」

工 手 数 0 か か る 細工 で す ね

格子し それ に結んであった、 どころじゃ な 11 青 11 娘は赤 印意 のあ 4 る 御神籤 御神籤を解 を結ぶ 61 とき、 て 持 つ 前 7 行 あ つ た 0

よ。 それに気が付 か な か つ た 0) か

本 当ですか 親 分

ガ ラ ッ 八 は 見 事 に + H 間 娘 に 馬 鹿 に さ れ 7 11 た 0 で す

解 る 赤 ょ 印 俺 ゃ 青 は 先 11 刻 印 0 ح 付 ^ 11 来 た た 御 とき、 神 籖 は 確 か 何 に 百 見 何 定 千 め 0 中 7 置 で b 13 た か 眼 ら 間

違

61

は

な

11

^

工

「ヘエー」

で 11 のを 驚 11 見な 大方 て ば か か 0 当 ŋ つ りは 居 た ず 0 に は つ < 手 だ ぬ あ ろ か 0 <u>ځ</u> ŋ 赤 だ 11 が 御 神 :籤を解と なあ に 11 赤 て 来 11 る 0 を見 が 宜 た 4 だけ 青

結 そう言 び捨てて行 うう 5 つ た、 に P 赤 ガ ラ 11 印 ッ 八 0 ある は 御 平 神籤 内 様 を 0) 解 堂 41 0 て 格 来 子 ま か 5 た お 菊 が

ح 11 つ は 楽じ や あ り ませ ん ね、 親 分。 皆 ん な が ジ 口 ジ 口 顔 を 見

るんだ」

結ず け 心 び 0 のま 配する とさ じ な な ょ 11 などをするの 泥 棒と間違 えら は れ どん っこ な野郎だろうと は な *(*) 男 思 0 わ せ れ る だ 縁ん

「なお悪いや」

が し、 で お 花 日 Þ 7 あ 紅 お 持 そんな事はどうでも るよ。 な や、 つ て り喜悦 来 Þ た 『当方無 は 0 λ ŋ 顔、 御ぉ だろう。 神籤 事、 か。 だ 宜 あと三 \neg 第 e st とし 廿 たぶ 病人は本 \mathbb{H} 七 吉、 0 て ん あ 昨 服 禄 見 日 11 事 すべ だ を 引 ·な筆_で 望 *(y* し、 ん 命 た に で 0 待 重 か で ^ 書き入 え 山 書 き込 来 な 頼 る る れ 6

「それは何んの事でしょう、親分」

入る』

ع

「判らないよ」

驚 11 た な ア、 親 分 が 判 5 な か つ た 日 に Þ 天道様 K だ つ 7 判 る

わけはねエ」

3 刻で 馬 限が 鹿 だろう。 な を言 ح れを元 え。 の通り格子 ろ で ^ 結 \boldsymbol{b} ん う 赤 で お 61 御 11 神 7 籖 れ を 取 ŋ

10

な 顔をするな。 精 11 つ ぱ 11 縁結び に 取り 憑っ か れ て e st

う な 顔 をする W

驚 41 た な ア

ブ ウ ブ ウ 言 4 なが らも、 八 Ŧī. 郎 は 赤 11 御 神 籖 を、 元 0 格

ま た。

そ れ から ほ W 0 煙 草を二三 服 した 頃

れ 見 る が 宜 11 0 お 前見た 11 な 縁結 び に 取 憑 か れ 7 11 る 野 郎

が 来 た や な 11 か

は と立ちま 手 少 平 は 次が 欝っ 恐 陶さ 指 た。 した粂の そう まだ若そう です 器 用 平 が、 です 内 様 素 な 0 着 格 知 流 ら 子 0 ぬ 前 顔 で格 弥造 に、 が 威 板 勢 か ら に 0 良 赤 つ 11 11 11 男 御 て 神 が 頬冠がある フ を ラ IJ ŋ

捕まえま しょうか 親分

ろ

つけ 馬 る 鹿、 6 だ。 御 神 落着 籤泥 棒 、先を見極 じ Þ 引立 め 7 さえすれば、 ばえ b あ るま わ 11 け P な 黙 眼 9 鼻 7 が 後 を

ょ

そ れ Þ 親 分

抜ぬ か るな 八

な ア 二本差 で なきゃ 多た 寡^ゕ 知 れ て 11 ますよ

門 離 お れ 0 八 方 Ħ. 郎 0 泳 と は 13 ヒ 緒 ラ で 行 IJ で ح た。 0 身をひる を、 平 次 は が は 仲 え 見 何 す 世 ع に か 覚ぼ 怪 東か 混 な み 0 男 0 61 心 中 が 持 平 を で見送 縫 内 様 つ 7 0 つ 雷 て を

0 晚、 平 次 の家へ 戻 って 来たガラ ッ 八 0 八 <u>F</u>. 郎 は、 申 分なく

さんざんの態でした。

ーあ、 鷩 た。 親 分 0 前 だ が あ つ し は ま だ、 あ ん な 野 郎 出 つ

くわしたことはありませんよ」

静、 声を張 \boldsymbol{b} お P 勝 何 判 自 のを着るとろくなことはな 手 慢 5 上げ の 口から ぬ 話げぶし ほ いう恰好だ て、 ど泥 は コ 平次 ソ に 横 コ 塗み 町 ソとでも入ることか、 れ , 0 0 て、 方に向い いわ 裏 全身 ^ ゆる大玄関に、 廻 (J か っ て埃をかぶ いたるところに ら て泥だけでも落すが宜 のが宜いよ、 り、 町内に響き渡るような 立ちはだかる 傷だらけ、 意 気 身につ な 袷 は 0 かな それ です。 ま 目 お

火鉢 に 別 П 条 小言 0 前 0 あ を に据えました。 る 4 いなが 0 は らも、 つもありません。 幸 とも い傷は摺り か < j /剝きと引 男振 り だ つ け 掻きだけ でも 直 て 生命 長

た 0 驚 か な 0 って、 こんな眼 に 逢 うと 知 つ た 5, 親 分

緒に行って貰うんでしたよ」

ガラッ八の仕方話は始まりました。

前 を、 神冷 玉 籤じ へ出 を て、 取 つ 本所 た怪 ^ 渡 0 男を って、 つ けて行 深川 へ廻って、 駒 永代を渡って 形 か ら、 お蔵

築地 本 郷 抜 5 湯 け て、 島 日本橋 来ると、 から神 H は ŀ 田 ッ ^ プ リ暮れたという 九段を登って、 牛 込 です。 へ出て、

「腹ごしらえはどうした」

平次は訊きました。

ん 日歩きつ だ 呑まず食わずですよ。 か、 足の づ 這 達 け 者な野郎 つ てるん て、 上野へ だか で、 塩は 来たときは二人とも 解 う 煮餅を買う隙もあ り つ や か しません」 り する と姿を見 り ^ ŀ 失 Þ 4 しません。 ^ ます。 ŀ 歩 e s で も半 恐ろ てる

「馬鹿だなア」

そ れが平次の深 甚んじん な 同 情 の言葉 でし た

ろく う。 きま 谷 りだが、 な 唾^ば したよ。 何なに 中 糞々で、 **へ**入 だ つ つ 口惜 て た ح いきなり御用 出 時、あ のまま続 しいことに声が出ねえ。 Þ しませんよ」 ん まり癪にさわ けた日 ッと来ました に や、 るか 夜 0 ね。 半日呑まず食わずじゃ 明ける前に らとうとう武者ぶ 威勢よ 参 く つ て Þ 仕し り った 付

「それから何うした」

がる。 なく つ三 親 5 分の前 つ れ ね ま じ合 だが、 た ょ ったと 0 口惜 藪ぷ 思うと、 0 し 中 11 ^ 0) 投り 何 込んで ん の ☐ < ... 惜ゃ って ` () $\overline{}$ あば が ょ 0 通 だっ り、 てや 手 P

「馬鹿野郎ッ」

ガラ

ッ

八

は

手

放

の

まま

ポ

口

ポ

口

と涙をこ

ぼす

の

です。

平次の声はりんとしました。

| | |-

何 6 だ つ て 夜 つ $\mathcal{C}_{\mathcal{C}}$ て 後を 跟っ け な か つ 6

「ヘエー」

が 岡 ^ エ、 引 じ ゃ た な いよ。 な みだ。 噛じ り 付 見 れ () ば たら、 ガ ン 首も 雷か 鳴なり 手足も無事じ が 鳴 っても 離さな ゃ な i s 0

「ヘエ」

それとも 何 W か 動きのとれ な 11 証 拠でも押えて来た の

お生憎様で」

お 生 一憎様 てえ奴があるか、 馬 鹿だな ア

平次もとうとう吹き出してしま いました。

前 もう に 頑張って、 一度行きますよ、 三日分ば かり兵糧かの兵糧を 親分。 明日 を背負って は姿を変えて つけたらどん 平内様 の お堂 なも 0

勝手にするが宜

行くほど でもありません。 ガラッ の 仕度を整え、 は頭を抱えて飛 () 翌る 出 日早々浅草へ乗込 しまし た。 そ の 晚 んだことは言うま の うち に、 大 阪

五

そ の翌る日、 ガラ ッ 八 は 見事 に 使命を果 しま

親

大変の旋風が飛込んだのは、親分、大変ッ」 戌刻半 (九時) 少し 廻 つ た頃。

っさ ア来たぞ。 今晩あたりはその大変が降りそうな空 模様だと

思ったよ」

平次はそれ を 期待 ていた の でしょう。

昨 日 と 異⁵が つ て 敵 に 覚 り ら れ ず に 見事に後を つ けましたぜ。 相手が

浅草 から真っすぐに 巣へ行 つ たんだか ら間違 e s はな いで しょう」

そ の巣は 何処だ」

所 相が 生が 町 裏長 屋

一日頑がんか 張ばら つ た が、 そ れ つ 切 り 出 て来ませんよ。 あ 0 風 体だ から、

見落す筈は無いんだが――_

お前 同 じこ ح だ、 姿を変え て 出たん だ ろ ِ ک

大時 あ 代 つ 0 婆ア b そ が れ に 人、 気が 付 念 仏 いて、 を称えながら商売物 いきな り飛込みましたよ。 0 姫ぬ 糊り を拵えて すると、

るじゃありませんか」

「それから何うした」

さ ん ざ ん 脅と か た末、 とうとう П を 割 ŋ ま たよ あ 曲 者

う 0 は 親 分、 驚 () ちゃ 13 けませ ん ょ

先ごろ を持 誰 が つ 殺さ お て どろく 11 ま長 れ た 用 崎 P 奉 0 進藤市 行を か して 太郎 -二千五百石 いらっ 0 伜勝之助と Þ 0) る、 大旗本、 () 外野将監様 う 男だろ 駒 形 に お 家来 屋敷

「どうしてそれを親分」

ガラッ八の驚きようは見事でした。

な お前 11 か が三 あ + 0 里も お菊と 歩 く W う娘を脅っ あ 11 だ、 俺は した ジ り ッ ع す か 7 た 11 る り 筈 れ は な け 61

とを言

わ

せ

る

0

に二

H

か

か

つ

たよ」

「人が悪いなア、親分」

ガラッ八は少しばかり不服そうです。

「ま ア 怒 る な 八、 何 で b 判 りさえす れ ば ょ か つ た ん だ

判 つ 6 だ か 5 怨ら み つ ح は あ るま

「それっ切りですか、親分」

骨を 野将 0 ま が だ 家 様 9 () 来 7 3 が 0 4 お 11 る 役 ろ 山 家斧三 0 目 0 に こ と で 郎 が 年前 駒 判 ع 形 腹を合せ、 0 か つ 留守宅で た ら よ。 長 崎 手 ^ は、 お 妾 出 つ 張 取 叔 • 早 0 く言 お 父 異じん 新 0 深 ع う ع 田 0 11 琴ん 掛 う 女を 吾ご 主 合 11 0 11 う

る

け

な

た 菊、 うに ては を屋敷 ぬ て わ て それに用人の市太郎をつれて、 帰 奥方 け 不義の汚名を被せられ、 こうするよりほ に る 向 ところも b の浪乃様を、 のこし、 け た。 行かな お なく 気 十 二 ° (の 歳 毒なこ 良人将監殿が江 かに工夫はな 跡 いろ 取 0 お いろ難癖をつけ 神んのじん様 嬢様 親類 に 早苗様 奥方 根岸 一党から義 か 戸 0 9 たし 0 浪 と ^ 御隠 十歳 帰 乃 て屋敷に 11 う る 殿 にな 絶 殿 は までは 0 さ 裏 ٤, 居られ れ の貸家 つ お た た 里方が お 奥 腰元 滅った ば 方 か 籠 0 り お

平次の話は つづきました。

腰元 案じ、 を が 無 知ら 事 根岸 を のお菊 青と赤 ゼ 計 の 監視 に に る苦衷 0) 籠 کر 智 0 4 つ 印 惠に及ぶ 0 た奥方は蔭ながら屋敷に 眼をく だっ 0) 用 () ろ 付 人進藤市太郎 た () 11 た 限 ぐ ろ の です。 ŋ, 御神籤を交換して、 りの工夫をこらし め そ し合せて の伜で、 0) 毒計 来た に のこした 対 屋敷に てそれ 抗して、 の は、 わ ずか 踏 **伜謙** 正 を守 行 ま 家と若君と に 届き過ぎる 之 護 お つ 進 た 互. しま 勝之 の 0 無 助 た を

た。 る 解 か どう あ 道 な 将 か 監 せ \boldsymbol{b} り ま ひらけ は長 りようも はなはだ覚束 た。 崎 0 その三日さえ無事に過せば、 お 若君謙之進の身も安泰になるでしょ 段猛 役目が済 ない 烈をきわ 、有様に ん で、 め なって て、 11 ょ そ 11 よ三日 いることも事実でし の三日を 奥方 0 後 無 0 無実を言 は 帰

敷 馬鹿なことを言え、 乗込め そ う 聴 わ 11 ち は Þ 放 町 11 方 つ て 0 お 岡 け 9 ま 引が せ ĸ 一千五百石のお旗本 乗込 ん で行 う

Ŕ 次の 武 家屋 悲 敷 しみはそこだ 0 塀~ 0 中まで ったの は、 です。 町 方の 手 11 か は に 届 証 きませ 拠が 山ほど揃 ん って

「口惜しいじゃありませんか、親分」

「だが、たった一つ」

平次は深々と考え込みました。

六

て、 町 青 れましたが、 0 明 御神籤 日は 隠 れ 家 11 に よいよ主人将監 の 曲者 ぐんぐん突っ込んで行く平次の 突きと めてしま 実は久野将監 が帰ると いまし た。 の家来進藤勝之助を本所相生 いう日、 最 初は 間 銭形平次は さん 41 に 追 ざん 41 詰 白 とうとう ば め 5 つ れ

助、仔細あって姿を変えたところで、 ゃ どう し ろと e st う の だ。 町方役人に 拙者 は 11 文句を言 か に b 進 藤 わ 勝 之

道理はあるまい」

した。 申 ŋ ´ます。 分のな 意気な袷の前をキ 二十二三のまだ若 () のが、 侍 0 ・チン 地が出ると、 いが苦味走った良 と合せ て 進藤 さすが 勝之 に 4 助は 犯がし 男、 兀 難 腕 角 に 11 に b ところがあ 坐 分 別 る に 0 で

進藤さん、 た相手も の申すことを聴 教え そう打ち明けて下さると何よりありが て上 いて下されば、 げましょう」 あなた の 親御 た 市太郎 e s 様を殺 あ つ

いえ、 父親を討 それ った は 0 は、 番後で申上げます。 誰だ。まずそれ そ から聴こうじ れよ り、 親 御様 ゃ な 市 4 太郎様

は は 御存 奥方様 で 0 御味方で よう ね す そ れともお部屋様方ですか、

勝之助の顔色はサッと変りました。

よく るよ 様 りまし 0 私 解 う 御味方だ 悪 た。 に 5 つ な て *()* 申 、 尻 を り、 お ります」 つ げ 押え あなたがそれを、 たに 亡く ま られ、 相違あ な ょ うか る頃は、 りま 後には次第次第 せん。 動きの どんな 父上市太郎 取 が、 に心苦し れ な に フ お ٢ 様 11 悪 部 P したこ 屋 さ 方 様 11 ح わ 方 れ な に か ょ 味 5 た は つ 悪 奥方 方 て す な

落 痛 だ 勝之助 て つ 行 た は で ジ よう。 心 ッ ع 0 弱 膝 11 に 眼を 父 0 落 姿を見ることが しまし た。 ح 0 ど ん 年 間 なに 凄ま 悪 人方 11 苦

ところが な つ た 後 残る、 父上 市 太郎 様 0) 汚ぁ 名ぃ は 何 ん

なさいます」

父の汚名?」

手 悪 御 人どもは悉く 覧に Ž 御 入れる 類方 細いる た にまで め をし 披 あ 露 な てしま た様 0 手筈 0 e s 父上市· ました。 な つ 太郎 て 明 お 様 日 ります」 を奥方 江 戸 御帰 不ふ

それは本当か」

勝之助の顔はもう一度変りました

手筈を定める ます。 今 市 夜 は 郎 ることでございま たぶ 様 ん 懴ん 悔じ 深 状が 田 琴点で作 り 御 部 Щ 屋 様 斧三 などと顔を合せ、 郎 が そ を 持 つ 最 後 ŋ

どうしてそれが解 ったし

げ 端 昨 々 て 夜 な か 菊 か ら、 ま らそれ位 0 言葉 () ま 三人の課者を入れ、 p たし のこと 父上市 は察しました。 太郎様 出入りの の 最 期 それ の 商 様子、 に 人はことごとく 駒 形 奥方 0 お 屋敷 の お 言 は べ 上 0

掴 ん 平次 で 0 周 到 さ は、 で た しょう。 つ た二 日 夜 0 間 に、 早く 件 0 **全**ゼ を

ま

つ

た

の

三人 の奥方様 あ でも ょ 0 つ 悪 わ 0 か 0 が 申 御隠れ家にお出下されば、 れ 宜し ば、 相 すこと 談 ゅうございますか、 何 が \boldsymbol{b} て 本 彼も分明 () るところを突きと 当 か 嘘 に か な ります。 今 進藤様」 親御様 晩お屋敷 め、 そ 0 敵 そ 0 0 上 の 話 0 内 名を申 で、 の 0 ど 様子が 御 隠 か げま 殿 に

人ども 平 次は念 の企みを知 を押 しま る工夫はな した。 ح か 0 青 つ た 年武士を の でし 用も う_。 う る ょ ŋ ほ か に 悪

よ 確と引 受けた、 そ の 代 b

勝 之助 は 青 白 11 顔を挙げます。 屈辱・ ح 義 憤 ワ ナ ワ ナ 頬 が

顫えます。

私 万 0 申 見込 私 て が 0 P 外 申 れ 張 すこ たら、 合 0 ع な が 嘘き 今 11 晚 ょ で かぎ うな私 た 5 ŋ で ござ 手 平 捕縄を返上し、 次 います。 の首を差上 斯⁻ う げ まし ましょう。 0 髷節を

切 つ てお詫 確 と言 び e s 葉を た ま 番が Ž た ょ う ぞ

之助 は フラ フラと立ち上が りまし た

0 後 0) と は、 長々 と書く ع 際は 限が もあ ŋ Í せ ん が ざ つ と筋

たの だ けを通すと、 0 で 悪者を取 した。 つ そ て 押え の晩進藤勝之助は、 て、 御隠 殿裏の 奥方 深田琴吾、 の 隠れ 家 山家斧三郎 に 飛込 で来

まり 父 は 取 平 り逃 次殿 0 事にその したが 悪名を負わ 席 一言もな に せ、 飛込んで、 明日 ° (1) 一は帰 まさに か く 府 察 0 0 一殿を欺く 通 し の通 り。 り、 残念ながらお たくらかで 悪人 ども あ つ ·部屋様 た。 は 亡^な き あ

上 かしこれより外に とうとうや の過失を償わ りなす れ ました」 つ た 御家安泰の道は か 、進藤様。 無か 御 つ 心 たでしょ 中 御 察 う。 申 見事父

勝之助 ところで、 平 八は挙げ 0 膝は 父の か け 敵だ。 き た手を膝 っと平次の方を向きます 約束通 K 置 り、 e s て、 教えて貰おう 奥方 0 方を か、 振 ŋ 返 平 次殿 る 0 で す。

申 よう。 父上市太郎様 の敵 は、 何 を隠そう、 父上

自身」

何 んと言う」

庇^{かば}った 間 入って父上を害 自害と知 でしょうな 一 何 ? 父上 に お 二 の 市 人 れては、 は、 太 で 、郎様は、 ここに居られる奥方様と、 相 め 談 父上様の非を発くことになりましょう。 たことに取繕 て、 身を恥じて自害をなす 刀を隠 った て格子戸 のです。 お女中 を外し、 った それ 0 0 お菊さん。 に です。 間 曲 違 者 が 41 咄^とっき は 万 な か 5 0

大きくうなずきました。 奥方浪乃 は うな垂れたまま涙を拭き、 女中 0 お菊は 眼をあげて、

奥方様 墓 さ れ で 7 ござ 判 に は りました。 *(y* 今 夜 ま した。 のうちに駒形 親 そ の敵を討とうとした れ で は、 ば の お 私はこ . 屋 敷 に のまま退転 のは、 お帰り遊ばし、 この勝之助 11 た します。 明 H の浅 は

晴 殿 様 0 御入府をお 迎え遊 すよう」

勝 之 助 さに溢っ は 畳 に双手を落す ので す。 ハ ラ ハ ラと 膝 を洗 う 0 は 若

さと純情 るる涙で した。

帰 あ つ て りが お とう、 れ。 勝之助、 殿様 へは、 何 もかもお前 私 からよ 0 お蔭。 申 ・します」 折 が あ つ た ら

奥方は蒼白 4 顔を挙げました。 激情に顫えますが、 限 ŋ

品 な美 しさです。

で は 奥方様

お待ち、 これ は、 せ め ても 私 の 志

奥方は手文庫 から、 持ちおも 重も ŋ 0 する金包を 出 して ひ た泣 勝之

助 押 しや りま す。

後 は 貰 4 泣きの お 菊と 平 次。 ガラ ッ 八 0 八 Ŧi. 郎 b 隣 り 0

部 屋 で 大きく 、 鼻を 啜 つ て 11 る の です

X

X

顔ん ま 末まっ 翌 方不 を る H は 知 人 奥方浪 を傷 に な け つ 乃、 な た 11 程 屋 と 度 敷 は 言 に K 報告 帰 う 迄も って良人久野将監 あ ま た ま いせん。 0 を お 新が 迎え、 そ 事 件 のま

ŋ

件落 着 0 後、 ガラ ッ 八 0) 八 Ŧi. 郎 は

市 太 郎 は 本 当に 自害 た 6 で す か 親 分

自 割 害な ŋ 切 b れ な 0 か 61 顔 立派な下手 を 平 次 に チ が ま あ け る る さ です

^

工

「奥方だよ」

_ ヘ ッ _

ガラッ八はさすがに胆をつぶします。

だこ だよ 細い 方と た 姓 ょ とを 曲 5 ع 工だろう。 が 0 者 曲 聴 用 て はそ ع 判 者 した に 緒 0 ら に 顔を見た つ て 俺は最初からあ 俺 れ た 進 な な 咽喉を刺されるとのど 0 に それ 藤市 が は大方察したよ。 る さ ん 11 11 じ 知 か る 刃物を隠した に味噌摺り うち、 りた 5 や 太郎 Þ ものが なく 手 な 末期の苦い か は 11 0 ` て、 本 か つ つ 無 用 人 0 当 た け さ いとい よう 奥方が怪 のも か 内 e s でも何 しい息 ら そ う か 悪 だよ。 一間抜な は お ら れ ょ 11 う 菊か 望みを 悪人に にあ 無 無 のも考えるとお ん の か 理 でも武 下から、 i s な。 あ に 0 法 つ と思 外 格 起 引き わ た がある 子戸 摺ず て あ した ん だ。 士たる者 て奥方を縛 つ て、 5 0 ゚は 奥方 て 娘は恐ろ れ 0 b 外 いたん だ。 た お 奥 0 か 方 0 が、 前 か か。 しな 方 が に 多 ら る だが を 分 曲 見 無 美 ことだ お 者 拝 正 飛 悧 面 5 誰 菊 が ん な 11 だ 素 巧 あ 奥 P か

赤 11 ず 0 平 で 御 れ 次 勝 神 は 之助 一籤を通 **う**。 う が 説 久 明 野 て結 す 家 る に ば 0 帰 れ で 参の た。 た。 上 ほ 0 お 菊 平 か 次 な ح 親 0 勝 橋 之 渡 み 助 0 始 で 0 何 末 あ に λ 13 だ 9 か は 61 な て る は

(編注)

ます。 底本の 作品中には、 なる古典的な文学作品でもあり、 が見られますが、本書が成立した当時の時代背景等が現代とは異 ままとしました。 身体 の障害や人権に ご理解、 ご諒承のほどをお願 かかわる、 著者が故人でもありますので、 差別的な語句や表現 い申し上げ

挿絵―萩 柚月

初出 「オ 1 ル讀物」 昭和十七年十一 月号 文藝春秋社

底本 「錢形平次捕物全集」 第七巻 河出書房 昭和三十一年八

月五日初版

編集・発行 銭形倶楽部



銭形倶楽部

http://www.zenigata.club/